

解放への一步

第38集

2011年11月1日発行・解放への一步第38集

- 編集発行 / 筑紫野市
筑紫野市教育委員会
筑紫野市同和教育研究会
筑紫野市同和問題啓発資料編集委員会
- 問い合わせ先 / 筑紫野市教育委員会教務課
TEL(092)923-1111
- 印刷 / 九州チューエツ株式会社

家を
船を
車を
工場を
樹木を
押しよせる巨大な灰色の波が すべてを一旦呑みこみ
呑みこんだすべてを吐き出すように引き波がまちを蹂躪する

人間を
思い出を
勇気を
希望を

巨大地震による大津波がもぎ取っていった
わたしたちの手元から奪い去っていった

電力を失った被災地の夜
闇が闇をとりかこみ暗黒となる

が、闇が深ければ深いほど
小さな星はきらめく

呆然と立ちつくす人、一人
その一人に そっと寄りそう一人
その二人に 肩を寄せる一人
それぞれが 手をつなぎ四人に
四人が 五人・・・

まちを壊しつくし 希望を奪いつくし
がれきの山と化したふるさととは 終戦直後の焼け野原のよう
1945年 焦土の中に 生かされた人びとで驚異の復興を成した
そう わたしたちの祖父母や親たちが成してきたのだ
もう一度、やれないはずはない

2011年3月11日

『この大震災からの復興は 子どもも大人も
九州の人も北海道の人も もちろん、海外の人たちも
み・ん・なで心をひとつに 助け合い のりこえてきたんだ』と
子どもたちに

未来に 語り継ぎたい

胸を張り ひとみを輝かせ 語りたい

『もちろん、放射能差別なんか みんなでのりこえたよ』と

Do for Japan & Jinken!



結婚差別を考える

他人は 「結婚差別などもうない」と 言う
そうだ！ そうだ！・・・

「差別はない」と 見知らぬ人は 言う

うん 「差別などない」と 何度も 自分に言い聞かせる
でも

そのとたん いい知れぬ不安で 息が苦しくなる

「思い過ぎだ」「心配性だ」「被害妄想だ」と 声なき声がする

ますます 胸が押しつぶされる

あそこの娘は 結婚式の招待状を送ったあとに破談になったという

あの息子は 両親にも祝福されないまま結婚し 見知らぬ土地へ移り住んだという

親に反対され なぐられ けられ 顔をはらした いいなずけを見た

あそこの息子は 自分から身を引いた

「あの娘は 婚約者に、”かへしつづけたまま”嫁ぐのだ」と話す母の目には涙がにじんでいた

「同和問題解決の最後の壁は、結婚差別だ」と 誰かがいう

その『壁』は なくなったのか

その『壁』は もうどこにもないのか

子どものころ 「あなたが大人になるころには 差別なき時代がきつとくる」と 聞かされた

子どものころ 「21世紀に部落差別を持ちこすな」と 聞かされた

大人になり 親になった 今

「互いを不幸にする 結婚差別は 悲しいことだ」と 他人が言う

そうだ！ そうだ！・・・

「いっしょに 差別をなくしましょうね」と 見知らぬ人が言う

うん 「最後の壁はのりこえられる」と 何度も 自分の中にこだまする
そう

そうなんだ わき立つような勇気で 息がはずむ

一人じゃないよ わたしがいるよ みんながいるよ 声が声をよび
やがて 我が胸は熱くなる



結婚差別とは・・・

男女の婚約・結婚に際して、相手方の家柄・学歴・社会的地位・「生まれ」などによって反対したり、解消したり（されたり）する行為をいいます。

反対する行為者は、当事者自身の場合もありますが、その家族や親戚など第三者の場合も少なくありません。

「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し・・・」と、憲法第24条でうたわれています。お互いの愛にもとづく合意のみが、社会的にも法的にも結婚を成立させているのです。

結婚差別の問題を考えていくことは、実は、私たち一人ひとりの結婚とは何か、夫婦や家族になるということとはどういうことか、しあわせとは何か、人は何を大切に生きていくべきかなど、多くのことを学ばなくてはなりません。

同和問題を学ぶという事は、私が豊かになるという

私は、子どもの頃からとても活発な子どもでした。多くの子どもたちがそつぽあるように、小学校のころからたくさんのお友だちが私の家に遊びにきました。そして、私もいろいろな友達の家へ遊びに行きました。

中学生になりました。中学になると、なにかもが新しく、他の小学校区の友だちも新たにたくさんできました。入学した頃の頃は、不安でいっぱいだった私にも、とても仲のよい友達もできはじめました。

そんなある日、今までとかな友達たちが遊びに来ても遊びに行っても、何も聞かなかった母親が「K子ちゃんってこの人？」「姓はなに？」「はい。」・・・なんでもなことを言うのだらつと思つて、「〇〇町か」・・・小学生の頃まではだれが遊びに来ようと、だれの家へ遊びに行こうと快く「気をつけて遊びなさいよ」と笑つて言つていた母が、中学生になったある日からなになく変わつてきたのです。

私は、同和地区のことについて家族からいろいろと教えられた記憶はありませんが、いつとはなく、どこからともなく聞かされてきた空気のようになり、私の心に刷り込まれていききました。

それは、このりのような違和感のようなもので、この間にか私の心の中で同和地区に対してのマイナスイメージがどんどん広がつていきました。

もちらつた、それは、その当時の私にこの、いふ当たり前の感覚で、罪悪感など全くありませんでした。

それからというもの、私は母の無言の言葉のとおり、あるいは世間一般にある差別的意識だったのかも知れませんが、K子ちゃんを避けるようになりました。

そして、仲が良かったふたりの間に埋めようのない深い溝ができてしまいました。

彼女には何も悪いところはありません。ただ被差別部落に生まれただけ・・・

お父さんやお母さんが被差別部落にルーツをもつところに生まれただけ・・・

ただそれだけのことなのに・・・彼女にとってたくさんのお好きなお家も否定されたのと同じだったのでは・・・

大人になった今でも、あの時、それまで仲良くしていた彼女を避けたこと、苦しめたことは、ずっとずっと私の心の中にもつらい記憶として残っています。

差別は、された人だけでなく、する側の私の心も不幸にしてみました。

私が、触れられなかったこの過去の出来事をふりかえれるようになったのは、あるきっかけで同和地区で取り組まれている識字学級にかかわるようになったことからでした。

かわり始めてしばらくたったころ、学級生として学ぶのである一人の方が、中学生の時に心に深い傷を負わせたK子ちゃんのお母さんであることがわかりました。

私は悩みました。どうしたらいいのかかわからず・・・

~~~~~

私が子どものころは、学校で部落問題について学ぶことはありません

たてでしたが、今の子どもたちは、小学校の年生からきちんと学んでいます。

部落問題が初めて小学校の教科書に記述されたのは、1974(昭和49年)です。「中学校は1972(昭和47)年」1974年度版では

幕府はまた農工商の下に、やうにいちだんと低い身分をおきました。これらの人々は、住む土地がかきまわられていて、田畑をもつものもいふくわすか、そのいふくわすはみじめでした。

この内容のものでした。それが、現在の教科書では、農民や町人からも差別された人々もいました。これらの人々は、服装や行事・祭りの参加などで厳しい制約を受けました。しかし、農業などを営んでねんぐを納め、すぐれた生活用品をつくりたり、芸能を伝えたりして、当時の社会や文化を支えました。

この記述に変わり、土農工商の言葉はありません。それは、この間の部落史に関する研究が大きく進展してきて、さまざまな史料の発掘とともに、新たな事実も明らかになってきたことや、差別の厳しさや悲惨さを強調するあまりに、子どもたちに被差別部落に対するマイナスイメージを強め、それが予断と偏見を生むことにつながってきているということから教科書の記述内容が見直されてきたと言われています。

そして、この40数年間の歩みの中で、同和問題の記述がさきかげつになって、教科書の中にさまざまな人権問題に関する記述が確実に増えています。

その過程には、同和地区の人々のさまざまな葛藤があり、何よりの、いわれない差別に終止符を打ちたいとの強い願いがあったことを忘

れてはならないと思います。

当時、同和問題について正しく教えられ、私自身もきちんと学んでいたなら彼女にそんな態度をとらなかつた・・・と言い切れるかどうかはわかりませんが、教科書をおして同和問題を正しく学び、まわりの大人たちの、一人ひとりを大切にしよう、とする感覚が、あたかなままなしの中に育つとするならば、少なくとも私と同じ過ちを繰り返さないと思つています。

「K子ちゃんをいふくわすのだらつたわ。」

その想いをめぐらせるといふくわすになった自分が、今もついています。

同和問題を学ぶことは、私を豊かにしてくれました。

新しい教科書を手に入、私はそう思います。



## いのちを大切にすること

私の妹は、四年前に生まれたばかりの子どもを残し天国へと旅立った。

その時のことは、今でも鮮明に覚え、忘れぬことができない。

妹が残した子どもは今四歳。たくさん言葉を話すようになった。

私たち家族は、あのことがきっかけで二年間甥っ子と過ごすことができなかった。

その二年間、私は、妹の遺影を見ては話しかけ、無数の星を見ては祈った。

そして、会えないゆえに思いはつの…

「きちんと食べているだろうか？ 病気はしていないだろうか？

か？…」

でも、一年前、私の結婚の時期を境とするから少しずつ会えるようになった。それには、地域の方の手助けもあった。本当にありがたかった。

今は、日曜日になると、甥っ子は来ないかな？と思いがちです。

いる。母から「蓮がきているよ。おいで」と電話がかかってきた時は、

私はそのくせと実家に車を飛ばす。

甥っ子と会えるようになったから数カ月後、私のお腹には小さな命が宿った。

妹が甥っ子をお腹に宿したときのように、この時もついてもうわしかった。

妹を亡くし、私のお腹に宿った小さな命に教えられていく。

人は決して一人では生きていけない。たくさんの人々に支えられながら、そして、無数の命あるものを食しながら、私たちは生かされていることを決して忘れてはけません。

\*\*\*

彼女は、このメッセージの中で、お腹に小さな命を宿した直後に病に倒れ、かわいい我が子の顔を見ることもなく天国へ旅立った妹と、死の直前に生まれできてくれた甥っ子、そして新たに宿ったお腹の我が子の成長を通して、「いのち」とは何か、「生きる」とは何かを私たちに問いかけてくれています。

「いのち」を大切にすることは、誕生の喜び、死の重たさ、生きることの尊さ、自分だけでなく他の人の命をもかけがえないものであると実感すること、つまり、「豊かな感覚をほぐくむ」ことにつながっていきます。

「この大切な」「生」「死」…いま一度みなさんと考えてみたいと思います。



だが、妹を亡くした私には妹のようにならないだろうかという不安もあった。だから病院も慎重に探した。そして、そんな時は、いつも私は、妹の遺影を見て話しかけていた。

そのおかげではないと思うが、つわりもなく、風邪をひくこともなくすばっている。

私は、お腹に手を当てては「元気に生まれておいでよ」「はあばたちも楽しみに待っているよ」「今日はすばく書いてよ」、もう蝉さんが鳴っているよ」と話しかけた。

そして、たくさんの人たちも私とお腹の赤ちゃんに話しかけてくれる。

お腹のわが子は、順調に大きくなっていく。胎動も感じるようになってきた。

胎動を感じては、連れ合いた「動いているよ」と言いつつ、お腹に手を当てると、不思議なものでお腹のわが子はピタッと動きが止まる。お腹の中で何かを感じているのだろうか？

お腹が大きくなっていくと、私の体は重たくなる。

階段を上るのも歩くのもスローになる。

寝るときも横向きでしか眠れない。臨月にもなると、さらにお腹は大きくなり、何をしても苦しくなるが、お腹の子どもが更になお大きくなっていく。

命というものが、どれだけ大切なものなのか、尊いものなのか、私は